

公立大学での養護教諭養成

学内リソースを活用した主体性、課題設定・解決力を養う学び

学生が主体となって活躍することができる学内リソースを積極的に活用することで、地域社会における課題設定・解決力を養うことができます。地域の創生と共生を育む**オンリーワンな取り組み**がここにはあります。

養護教諭を目指す人必見！

スポーツ健康学科で取得する『養護教諭一種免許状』 名桜の特徴といえる**3つの学び+地域連携**

1 スポーツと健康の両分野での学び

スポーツは、子どもの成長や発達にとって重要です。健康づくり・予防的な観点から**スポーツの意義や運動する楽しさ**について学ぶことができます。

学校におけるケガは体育や部活動などのスポーツに起因することが多いです。ケガを予防するための対策や健康を支援する学びが得られることは大きな特徴です。

2 養護教諭の専門性を重視した学び

小・中学校、高校、特別支援学校で長年勤務した教員が授業を担当しています。学校で採用されたその日から養護教諭として実践可能な**多面的な能力**を育成しています。

3 ピアエデュケーションを活用した学び

学年を超えて**学生同士で学ぶ**ことができる授業がたくさんあります。互いに年齢が近いことで、学ぶ側も教える側も一緒に成長できます。



地域の学校と連携した実践的な学び

地域の小・中学校、高等学校等と連携した保健室支援活動や児童生徒向けの保健教育を行っています。子ども理解や養護教諭の職務への理解を深めることができます。



名桜だからできる!!**オンリーワン**の養護教諭養成

健康やスポーツ、ウェルネスに関する知識・技術をもとに、子どもの健康課題の解決に向けて「**こころ**」と「**からだ**」の両面から支援できる養護教諭の養成を目指します。





名桜の在学生の声

「スポ健で養護教諭を取得するお勧めポイント」 伊波 奈津美 (沖縄県立名護高校出)

本学科の養成課程は、学校現場で長年の経験を積んだ教員が授業を担当されていることから、学校での様々な経験を聞くことができ、学ぶモチベーションが高まります。教科書だけでは学ぶことができない授業内容が豊富にあります。また、スポーツと健康の両分野を学ぶことができるのも大きな特徴です。ケガの予防や対処なども含め、スポーツや健康に関わる幅広い知識を習得できます。

スポーツ健康学科は、養護教諭を目指す方にとって設備の面でも理想的な環境が整っています。さらに地域の人と関われる学内ボランティアもとても多く、名桜だからこそその自己成長を育みながら、養護教諭としての良質な基盤を築くことができると思います。



「看護実習から得た学び」 佐藤 悠 (宮崎県立宮崎北高校出身)

養護教諭にとって医療的な知識を持つ必要性を学んだ看護実習でした。救急外来の見学を通して、養護教諭が救急処置において行うべき観察や対応について学ぶことができました。また、病棟実習では実際に血圧測定やシーツ交換、車いすでの移動など、患者さんと直接コミュニケーションを図る貴重な体験もできました。続く療育センターの実習では、重度の障害を抱えた子どもへの対応、コミュニケーション法など、大学の講義だけでは得られない貴重な経験と学びになりました。さらに、消防署の実習では、救急要請で必要な情報や養護教諭が学校全体の連携の糸を結ぶことが救急対応のカギになることを学びました。



「学校でのフィールドワークの経験」 大城 末愛優 (沖縄県立具志川高校出身)

名桜では、地域の学校でのボランティアを行う機会がたくさんあります。私も名護市内の小中高の健康診断のお手伝いとして、児童の列の整理、検査で使用した機材の洗浄、データ入力などをさせてもらいました。また、ゼミ活動では、小学校と高等学校で性教育も行いました。先輩方と一緒に活動するため、指導方法などを直接学ぶことができます。こうした学校での様々な経験を通して、自分が現場に立った時に何が必要なのかイメージがしやすく、勉強のモチベーションにも繋がっています！看護実習では、医療現場で医学的・看護的な視点で学習することで、自身の知識・技術の未熟さや学校での講義がいかに重要であるかを再確認しました。これからも教育実習に向けてしっかり学びたいと思います。



「学校救急看護学の学び」 廣池 咲穂 (福岡県立新宮高校出身)

学校救急看護学が救急処置の集大成となる授業です。授業の指導は先生方だけでなく、養護実習で現場経験をされた先輩方からも助言を受けることができます。最初に、担当学生が救急処置全体の流れを実演し、次に各グループに分かれて演習を行います。様々な事例に対する処置や対応をその場で考え、一人ずつが実演するという流れです。初めは自分の知識や技術のなさに落ち込むこともありますが、演習を積むごとに知識や技術が身についていることを実感することができました。学校救急看護学を通して、児童・生徒に対する声掛けや処置だけではなく、適切な対応につなげるための問診や観察の工夫、学校内外の関係者や保護者との連携の仕方など、細かな部分まで学ぶことができました。

